

「人間の砂」にみる個人主義的な同質化

アンリ・ルフェーヴルのニーチェ受容の一側面

山本 千寛

はじめに

フランスの哲学者・社会学者アンリ・ルフェーヴル (1901-1991) の著作は、1980 年代以降に英語圏の人文地理学者エドワード・ソジャやデヴィッド・ハーヴェイらによって都市論の重要な思想を提示したものととして再読され、2000 年代からはフランスでも英語圏での研究成果をもとにした再評価が行なわれている¹。『都市への権利』と並んでこうした再評価のなかで頻繁に参照された著作として、1974 年の『空間の生産』を挙げることができる。

同書における問題意識についてルフェーヴルは、のちに書かれた第 4 版への序文のなかで、現代の空間がもつ「同質性－断片化－序列化」という 3 項からなる論理が、知や文化をも含む社会全体の作用においても同様の効果をもつものとして表出していることを指摘する²。つまりそれは、社会全体が虚偽の「集合」としての同質性を保ちつつも、実際には区画やゲットー、孤立集団などにばらばらにされたままであって、しかもそれらが政策決定や商業活動を行なう社会の「中心」から、その「周縁」の空間へと序列化されていることを意味している。

社会理論研究者のクリス・バトラーや都市社会学者マーク・ゴットディーナーらの先行研究において、ルフェーヴルのこうした主題はもっぱら「空間」に限定され、『日常生活批判』をはじめとしたそのほかの著作の議論との明確な連続性は指摘されてこなかった³。しかしながら、『日常生活批判序説』(1947、以下、『序説』とする)以降のいくつかの著作に注目すると、少なくとも上述の 3 項のうちの「同質性－断片化」についてはルフェーヴルの一貫した主題として論じられているのではないかと仮説を立てることができる。その論拠となるのが、諸個人がばらばらにふるまいつつも、ひとつの同質性を形成することを論じる際にルフェーヴルが用いる「人間の砂」というニーチェ由来の概念である。

本稿の目的は、この「人間の砂 [sable humain]」概念が時期の異なる複数の著作で一貫して用いられていることに着目しつつ、ルフェーヴルにおける「断片化されたものの同質性」への視

座を明らかにすることにある。それと同時にこの概念がニーチェ由来とされる点を鑑みれば、本稿の作業はルフェーヴルがニーチェの思想をどのように受け取り、20世紀フランスの社会状況のなかでそれをいかに乗り越えようとしたかということについて、その一端を示す作業でもある。なお、「序列化」に関しては教会をめぐる議論や官僚制、「中心一周縁」論などへの幅広い参照を必要とするため、紙幅の制限のため他の機会に議論を譲ることになる。

フランスにおけるニーチェ受容史におけるルフェーヴルの独自性は、すでにいくつかの先行研究において指摘されている。例えば哲学者ベルナール＝アンリ・レヴィは1938年頃のフランスにおけるニーチェ受容の例として、アンドレ・ジッドの「壊し、覆すニーチェ」やベルクソンのニーチェなどと並んで、「社会主義者ニーチェ」を提示した思想家としてルフェーヴルを挙げている⁴。これは1939年のルフェーヴルの著作『ニーチェ』に着目した評価である。社会学者ルイ・パントも同じく、同著とその執筆期を振り返った『総和と余剰』（1958）の記述を中心に読解しつつ、ニーチェを「捉えがたい[insaisissable]」存在とする姿勢にルフェーヴルの独自性を指摘する⁵。またパントは、ルフェーヴルがマルクスの弁証法的唯物論を補完するものとして、文化と個人にいつそうの関心を持ったニーチェのテキストを読解していることについても、1940年前後の受容としては特徴的であったことを指摘している⁶。

ほかにも『空間の生産』についてはニーチェ由来の隠喩の議論に着目するクリス・バトラーや、「アンチ・ロゴス」を鍵語としたアンディ・メリフィールドによるルフェーヴルのニーチェ解釈についての指摘がある⁷。また『ヘーゲル・マルクス・ニーチェ』（1975）についてもルフェーヴルがニーチェから「創造」の問題を継承したことを指摘する都市理論家スチュアート・エルデンの議論が確認できる⁸。しかし、これらの先行研究は特定の著作におけるルフェーヴルのニーチェ読解を指摘したものであり、複数著作に共通したルフェーヴルのニーチェ受容については十分な考察が確認できない。

「人間の砂」概念は初出と考えられる『序説』（1947）以降、『私的意識』（1950年代に準備された断片的な原稿）、『現代への序説』（1962）、『メタ哲学』（1965）、『ひとつの立場』（1968）、『差異主義宣言』（1970）と確認できるだけでも、およそ四半世紀のあいだに刊行された6つの著作において言及されている⁹。このように本稿は、複数著作に共通したルフェーヴルのニーチェ受容を論じる点で、ルフェーヴルの思想研究のみならず、フランスでのニーチェ受容史におけるルフェーヴルの位置づけに関する研究にも寄与するものとなるだろう。

以上をふまえて本稿ではまず、ルフェーヴルの「人間の砂」概念が示す同質性の特徴と、その参照元となったニーチェのテキストについて考察する（第1節）。ついで、1950-60年代においてニーチェ的な「人間の砂」というあり方が悪化した状態として語られる20世紀の「人間の砂」の諸状況について「組織」と「代替可能性」を鍵語に考察する（第2節）。最後に、同質性に包摂されない人びとについての論じ方に着目してルフェーヴルが「差異」概念によってニーチェの思想に寄り添いつつ、それを乗り越えようとする点について明らかにする（第3節）。

1. 「人間の砂」とは何の喩えなのか——初期の含意とその典拠

1-1. 「現代人」を考えるための出発点としての「人間の砂」

ルフェーヴルが初めてニーチェを真剣に読んだのは、第一次大戦前のリセ・ルイ＝ル＝グランの2年次であった¹⁰。アンドレ・ブルトンを介してヘーゲルの論理学に興味を持ち、ヘーゲル研究の延長でマルクスに接するのが1920年代前半であるから、ニーチェの著作はルフェーヴルが最初に触れた哲学のひとつであったことが分かる。

1930年代にルフェーヴルはニーチェを読み直し、自身の議論のあとにテーマごとのニーチェの言葉の断片集を付した著作『ニーチェ』(1939)を刊行する。だが、この時点では「人間の砂」概念はまだ用いられておらず、断片集にも「砂」に言及したニーチェのテキストは引用されていない。また、ルフェーヴルは「人間の砂」概念がニーチェ由来であることは明記しているもののその典拠については明らかにしていない¹¹。では、「人間の砂」概念はいつから本格的に論じられはじめており、ニーチェのテキストにおいてその典拠となっている箇所はどこであると考えられるだろうか。

ルフェーヴルの思想をめぐる先行研究には同概念を論じたものは確認できず、ただ教育学者シュール・ミドルトンや政治学者ホルガー・ヘンク、社会学者アンディ・ベネットの文献において引用文の一部に同概念が含まれているのが確認できるのみである¹²。それゆえ、まずはルフェーヴルによる「人間の砂」概念についての初期の言及とその意味内容を確認し、そこでの含意を手がかりに典拠を探る必要がある。

確認できる範囲で最も初期における同概念への言及は『序説』のうち、ルフェーヴルが「日常生活批判としてのマルクス主義」の諸主題とその批判点を要約する箇所である。「私的意識」にもとづく同時代の個人主義を批判的に取り上げつつ、ルフェーヴルは以下のように「人間の

砂」概念を用いている。

おかしいことに、人間の砂粒のそれぞれは、自分自身が他と区別されているばかりでなく、どこまでも独自だと信じている。ところで、ある一つの砂粒には、他の砂粒が最もよく似ている。[…] その様態や、我関せずの態度 [quant-à-soi]、その言葉、身振り、日常生活習慣 ([…])において、奇妙に類似した諸個人。[…] 現代人についての客観的人間学、科学的な叙述は、この見かけ上の逆説から出発しなければならないだろう¹³。

ここから、「人間の砂」概念がルフェーヴルの人間学の出発点という重要な位置を与えられていることがわかる。それと同時にこの概念の含意についても、個人主義的な同時代人たちが自分は自分であって他人とは違うという意識のもとに行動した結果として逆説的に生じる、ふるまいや態度の同質性であると理解することができる。

諸個人が信じている自らの独自性については、年代順に見ると『序説』のつぎに同概念への言及が確認できる 1950 年代の『私的意識』を準備する原稿の断片においてより掘り下げた考察が行なわれている。すなわち、ルフェーヴルはこの状況を「個人に抗する個人主義」の語に換言しつつ、マルクスやニーチェが理想とした「全体的人間」によって実現する「具体的な個人性 [l'individualité]」とはほど遠い、表面的な「仮面の人格 (ペルソナリテ)」が個人主義的な同時代人にとっての独自性であると指摘する¹⁴。

仮面が深遠な「^{ペルソナリテ}人 格」の前にある。しかし、仮面によって形成された^{ペルソナリテ}人 格 はそれ自身、仮面 (ペルソナ) でしかないのである¹⁵。

一方でこの諸個人の仮面に着目するミクロな視点ではたしかに各人は独自であるように見え、実際に自身が独自であると信じている。しかし他方で、ふるまいや言葉づかいに着目するマクロな視点ではほとんど独自性は見当たらず、むしろ諸個人の同質性が目立つ。本稿ではこれを便宜的に個人主義的な同質性と表現する。ルフェーヴルのテキストにおいて、こうした状況が「砂」に喩えられるのは、砂粒のそれぞれは「ルーペで見ると別々の、とても異なるものであるが、目で見ると非常に似通っている」からである¹⁶。つまり、たんにばらばらなものの比喩と

してではなく、視点の据え方によって同時に独自にも、同質的にも見えるものの喩えとして「砂」が用いられていると考えられる。

1-2. 典拠としてのニーチェの「砂粒」論

すでに指摘したようにルフェーヴルはこの「人間の砂」概念について具体的な参照先を明示しておらずニーチェからの借用であることを述べているのみである¹⁷。しかし、まったく同一の表現をニーチェの著作のなかに確認することはできない。それゆえ、前項で確認した意味内容と「砂」、個人主義、同質性の各概念を手がかりに典拠を探らなければならない。

個人主義を論じる文脈でニーチェの「砂」についての議論を参照した他の思想家の記述を探してみると、その稀有な例として哲学者ジョルジュ・パランの 1913 年の著作『個人と社会の対立関係』のなかに「ニーチェが語った砂粒」というルフェーヴル以前に個人主義の文脈で言及された例を見出せる¹⁸。ただ同著ではその含意についてのパランの説明は確認できず、ルフェーヴルの「人間の砂」と同様の含意で使用していたかどうかという点は定かではない。

この「砂粒 [grains du sable / Sandkörnchen]」に着目してニーチェのテキストを読み直してみると、「人間の砂」の典拠となった可能性の高いテキストをふたつ見つけることができる。ひとつは『ツァラトゥストラはこう言った』（以下、『ツァラトゥストラ』）の第三部のなかの「小さくする徳について」において、ツァラトゥストラを誘惑し説き伏せようとする「小さい人々」を「砂粒」に喩えている以下のような記述である。

彼らは相互に円満で、正直で、親切である。さながら砂粒と砂粒とが互いに円満で、正直で、親切であるように。[……] 彼らは誰に対しても先んじて、親切をつくす。[……] 彼らにとって、徳とは、人を慎ましやかにし、飼ひ慣らすものである。それによって彼らは[……] 人間そのものを化して人間の最上の家畜となしたのだ¹⁹。

たしかにここでは個人が砂粒に喩えられていることが確認できる。しかし、前節で確認したルフェーヴルの着眼点のようにミクロな視点において仮面の独自性を保ちつつも、マクロな視点では同質的であるという砂の性質への着目は、ニーチェにおいては確認することができない。ただ、上記の引用の最後の部分に家畜としての人間、つまり「畜群」と「小さな人々」の同一

性が指摘されていることに着目すると、砂粒の比喻を用いたニーチェの議論の背後に同質性への問題関心があったことも指摘できる。なぜなら、同著の冒頭「ツァラトゥストラの序説」においてニーチェはすでに畜群を同じものを欲しがり「誰もが同じ」である存在として告発しているからである²⁰。

典拠である可能性が高いもうひとつのテキストとして『曙光』（クレナー版第174節）での「人類が砂になる」ことを論じる箇所をあげることができる。こちらは「砂粒」ではなく「砂」という表現ではあるが、筑摩書房版全集の『ツァラトゥストラ』の訳注においても上記の「砂粒」の比喻の前提となる表現として指摘されている箇所である²¹。

現在の道徳的流行の原則——「道徳的な行為とは、他人に対する同情心の行為である」——の背後に、恐怖心という社会的な衝動が支配するのを、わたしは見てとる。[…] 公共の安全、社会の安寧感を目標とする行為だけが、「よい」という述語をもらって差し支えない！——そのような恐怖心の専制政治がひとびとに最高の倫理法則を指令する […]。[…]われわれは人生からあらゆる鋭さと角をはぎとるという、そんな途方もない意図を持つことによって、人類が砂になる最上の道を歩んでいるのではないか？砂！小さく、柔かで、丸く、無限な砂！それが諸君の理想なのか、諸君「同情的興奮」の伝令者よ！²²

『ツァラトゥストラ』の例との大きな相違点は、「よい」ことをしなければならないという「恐怖心」への言及であるが、ニーチェ研究者の井西弘樹も指摘するように、上記の引用箇所はニーチェが「道徳感情の流行が、人間を全体に奉仕する部分として、似たり寄ったりの、均質的な存在にしてしまう」とする箇所である²³。つまり社会的・国家的次元への奉仕の行為だけが、「よい」ものであり、それを逸脱しない範囲内で諸個人が存在するという意味でそれは類似的、同質的存在であるという議論だと考えられる。「人類が砂になる」という表現で、人間と砂が同じ一文で用いられているという点においては、ルフェーヴルの「人間の砂」の表現にもっとも近いことは確かである。しかし、こちらにも上述のミクロとマクロの視点で砂を捉える姿勢は確認できない。

「砂」、個人主義、同質性の3つの鍵語から探ると以上のふたつのニーチェの言及を見出すことができるがここまでの検討から厳密にどちらが典拠であるのかという点を結論づけることま

ではできない。ただいずれにしても、道德感情によって人間が公的に「よい」とされること、あるいは「親切」を行なうなかで同質性を形成する人々を指したニーチェの「砂粒」あるいは「砂」の表現を継承している可能性が高いということは指摘できる。

しかしながら、上記のふたつの引用においては同質性については関連性が確認できたもののルフェーヴルのいうミクロな視点、つまり自分自身を表面的には独自だと考える個人主義の姿勢については、どちらも十分な論拠とはなっていない。この点については、「人間の砂」が用いられるよりも8年ほど前に書かれた著書『ニーチェ』(1939)の註からルフェーヴルのニーチェにおける個人への着眼を見て取ることができる。すなわち、ここでルフェーヴルはニーチェにおける個人の描写の典型例として同書の「見せかけの利己主義」を論じた一節(クレーナー版第105節)を指摘しているのである²⁴。ここでルフェーヴルは「自我の幻想」のために行動する利己主義的な人々を描写している²⁵。それゆえ、こうした利己主義的な人間をめぐる議論と、上記で確認した個人が「砂」になるという議論の双方がルフェーヴルの「人間の砂」概念に流れ込んでいると考えられる。

1.3. ルフェーヴルの「自由」論から考えるニーチェとの相違点

ここまでルフェーヴルの「人間の砂」概念の含意とニーチェにおけるその典拠について考察してきた。本節の最後に「人間の砂」概念に関わる範囲でルフェーヴルとニーチェの両者の思想の相違点を指摘しておこう。それはニーチェ的な「道德感情」や「親切に」することによる同質化ではなく、「我関せずの態度」が同質性の一端をなしているとルフェーヴルが論じる点である。これにはマルクス由来のルフェーヴルの「自由」のとらえ方が関係している。

ニーチェが「見せかけの利己主義」を「自我の幻想」から論じたのに対し、マルクスは『ユダヤ人問題によせて』において、フランスにおいて確立した「人間の諸権利〔droits de l'homme〕」がすでに「利己的人間の権利」を裏付けするものであるという論理で利己主義を批判的に検討している。マルクスは1793年憲法や1791年の人権宣言における「所有権」や「自由」についての記述を参照しつつ、それらの権利が孤立してばらばらの「モナド」となった個人を前提としているために、結局は「分離への権利」となってしまう点を看破する²⁶。

ルフェーヴルは『序説』のなかでこのマルクスの議論を引用しつつ、これらの条文における「自由」が、「個人意識」や「人^{ベルソナリテ}格」の権利を確保するものとして信奉されていることを批判

する²⁷。ここでの「自由」は消極的なものであり、それは以下のような発想につながることをルフェーヴルは指摘する。

隣人を段々と侵害していかないために、たとえ彼を助けなければいけない場合でさえ、ひとは何ひとつおこなわない²⁸

つまり、ルフェーヴルはマルクスに倣って「人間の権利」を「分離への権利」と捉え、「個人の良心」の問題はこの分離のうえにしか成立たないという立場を取っていると考えられる。すなわち、ルフェーヴルはマルクスに倣って「分離への権利」としての消極的な「自由」を批判するために「人間の砂」概念を用いているために、ニーチェ的な他人を親切に助ける個人ではなくて、他人の権利を害さないためなら助けられる場合でも「我関せずの態度」をとるような分離した個人を前提にしていると考えられる。

では、「人間の砂」が克服された状態における「自由」とはルフェーヴルにおいてどのように想定されているのだろうか。すでに「仮面」ではない「具体的な個性」が目指されていることは簡単に紹介しておいたが、その個性を支えるのは「自由な共同体における自由な個人」の実現である。

全体的人間は自由な共同体における自由な個人である。それは可能な個性の無限な多様性において発達した個性である²⁹。

この実現が『弁証法的唯物論』（1939）から『序説』を経て、少なくとも『マルクス主義』（1948）に至るまでの全体的人間の議論のひとつのスローガンになっている。前半の「自由な共同体」については、自身の属する国や階級が他の国や他の階級に隷属している状態を脱することを意味する。そのとき初めて、「社会全体の管理に参加」したりすることを通じて、諸個人も国家を含むなにかに物質的あるいは精神的に「隷属」する状態から具体的になにかに力を作用させることのできる存在になる、これがこの時期のルフェーヴルの念頭にあったマルクス主義的な自由である³⁰。そして、こうした新しい状態において物質的にも精神的にもさまざまに力を発揮する個人の姿が「人間の砂」における「仮面」の独自性に代わる具体的な個性として想定されて

いると考えられる。

2. 悪化する「人間の砂」

2-1. 「人間の砂」に対する初期の楽観的態度

つぎに 20 世紀半ばの時代状況に合わせて、ルフェーヴルが「人間の砂」概念で捉えた個人主義的な同質化への視線をどのように変化させていくのかという点を明らかにしていこう。『序説』において、「人間の砂」概念はそれ以前のルフェーヴルの主要な問題関心のひとつであったファシズムの問題と接続されていた。ルフェーヴルはファシズムを「集団的な精神眩惑」と捉え、この状態のもとでは諸個人が「神秘化された意識」をもつとする³¹。そしてまさにこうした神秘化の基盤が「人間の砂」であることが指摘される。

昨日の個人主義者たちはすさまじい勢いで走り出し、この上もなく狂気じみた卑俗で凶暴な「観念」に興奮した群衆となり、徒党を組み、残されたわずかな人間的理性も自分たちを抑制することができないままに、まっすぐ集団的な精神眩惑に突っ込んでゆく³²

同書の「神秘化の批判」の項において、ルフェーヴルは、利己的な、つまり「私的な [privé]」個人が「真理」についての意識を「奪われて [privé]」いるために、自身のうちに籠もって、歴史的、社会的な諸々の現実をすべて我流に解釈してしまう結果として、イデオロギー的な幻惑に弄ばれやすくなってしまうことを指摘する³³。さらに、ひとたび物質的、経済的あるいは政治的な危機が勃発すると、個人主義的な同質性が一斉に瓦解し、「ファシスト的『大衆』、『組織化』」へと向かうというのが、1947 年当初にルフェーヴルが「人間の砂」の結果として想定した事態であった³⁴。同書における上記の議論はやや性急なものであることは否めないが、ルフェーヴルの 1930 年代におけるファシズム的熱狂への批判的姿勢と「人間の砂」との関連性を端的に示している。

しかし、こうしたファシズムとの連関性を部分的に示唆しながらも、『序説』におけるルフェーヴルの「人間の砂」の将来への展望はあくまで楽観的である。上記で確認したように諸個人が自己のうちに閉じこもることが問題なのであれば、それをやめて自らの「生を変えること」に邁進すればよいというのである³⁵。そうすることで「全体的人間」への弁証法的な発展が必然

的に起こり、マルクスのいう人間の「疎外」というおおきな運動は終わるというルフェーヴルの姿勢がこの時期までの著作には一貫して見て取れる。そして、この「疎外」の終結こそまさに、「人間の砂」のおわりである。それが「個人が […] 人間の砂のひとつ粒ひとつ粒であるという快い幻想であることをやめる」という表現に端的に表されている³⁶。

ところが、1950年代後半以降にルフェーヴル自身が同時代社会における「疎外の終末」の兆しが見えないと覚えることによって、この楽観的な態度は修正を余儀なくされる。このことは『現代への序説』（1962）における下記の記述により明らかである。

今日われわれはマルクスほどには、疎外の絶対的な終末を確信してはいない。疎外は消滅しなかった。その逆なのである³⁷。

このような態度修正をきっかけに、1950年代後半以降のルフェーヴルは疎外の悪化を個人のあり方に着目して考察していくことになる。「人間の砂」によって語られた個人主義的な同質化についても当然もう一歩進んだ議論へと展開するのであるが、それが必ずしもルフェーヴルがニーチェから距離を取るということを意味しないという点について次項でくわしく見ていくことにしよう。

2-2. 「組織」の時代の到来と諸個人の「代替可能性」

「人間の砂」で語られた個人主義的な同質性について、『現代への序説』ではこの同質的な面をより強調して「平均人」という表現が用いられるようになる³⁸。すなわち、組織にとっての機能的な「平均地帯」が社会にできあがり、そこではその機能や職務を遂行できることが優先され、個人の独自性は評価されない。つまり諸個人はいつでも誰とでも取り替えられてしまうという自身の「代替可能性 [remplaçabilité]」の問題に直面する。こうした論理によって、ルフェーヴルは、「仮面」による独自性を確保してもなお、「代替不可能性 [irremplaçabilité]」を確信できないために不安に陥る個人という新たな視点を導入することになるのである。

これが意味するのは、「平均的」な諸個人を取っかえ引っかえする「組織」が台頭する時代の到来である。

われわれは組織（社会的な、政治的な、軍事的な、等々の）のみが必要で余分ならざるものの 〔nécessaires et non-superflus〕 に見える時代を生きているのである³⁹

つまり、ファシズムについて『序説』で論じたような「熱狂」ではなく、ふるまいの同質性に着眼した「代替可能性」による社会状況の悪化をルフエーヴルは同時代に見てとっていると指摘できる。「個人に抗する個人主義」をつきつめると、個人ではなくむしろ組織が台頭する時代が到来するという「逆説」的發展の提起である。

ところで、こうした同質性の議論の展開はルフエーヴルをニーチェの議論から遠ざけているのだろうか。上記の引用に着目すると、「組織」だけが必要で余分でないものになるというルフエーヴルの表現のうらに、人間が不必要で余分なものになってしまった時代という含意も読み取ることができる。ここでルフエーヴルが引用符なしに用いる「代替不可能性〔irremplaçabilité〕」、「必要な〔nécessaire〕」、「余分な〔superflu〕」というそれぞれの表現に着目すると、『総和と余剰』（1958）の執筆時期にはすでに刊行されていた仏訳版『ツァラトゥストラ』の国家における人間を論じた以下の一節との使用語彙の重複を見つけることができる。

国家が終わるところ、そこにはじめて人間が始まる。余分な〔superflu〕人間でない人間が始まる。必要な〔nécessaire〕人間の歌が始まる。一回かぎりの、代替不可能な〔irremplaçable〕歌が始まる⁴⁰。

つまり、1950年代後半から1960年代にかけてのルフエーヴルはニーチェの「砂粒」論を支えた個人主義的な同質化の議論のうち、同質性に関わる部分を同時代の現実には照らして「組織」における人間の代替可能性という議論に練り上げつつ、それによって同時にニーチェの「余分でない人間」、「必要な人間」の実現という展望を引き継いでいると考えられる。

2-3. 「内に閉じこもる」ことの悪化

こうした時代に合わせた議論の修正の帰結として、ルフエーヴルは1967年に「人間の砂」が「逆説的なまでに悪化し、強化された」状況の到来を指摘する⁴¹。本稿ではこれについて「人間の砂」概念が当初から含意していた利己的に自分の「仮面」の独自性を信じながら自身の「内

に閉じこもる」個人主義的側面と、ふるまいや態度の同質性の側面がどちらもそれぞれに悪化したことを順に指摘する。

『序説』では解消が可能なものとされていたはずの自己の「内に閉じこもる」という側面の悪化については、『日常生活批判Ⅱ』（1961）における「倦怠 [l'ennui]」とメディアとの関係を論じた箇所を参照しよう⁴²。ここではマス・メディアの台頭によって、メディアに映る世界と画面の前の自分たちの世界の分離がなされ、自分たちが能動的に参加できない画面のなかの世界に対して、倦怠感をもつという議論が展開されている。

すなわち、ラジオやテレビによって「私的な」個人の視線は自分たちの生活環境からは遠い「世界」へと開かれて、技術化や宇宙の探索から、政治的な駆け引き、あるいはスターや億万長者の日常生活にいたるまで仔細に見聞きできるようになる⁴³。しかし、ルフェーヴルはこうして社会が見通せるようになることは、あくまで「受動的に熟視される世界性」をもたらしているにすぎないと批判する⁴⁴。

そして「内に閉じこもること」の悪化は、こうした参加できない世界や社会の代わりに、諸個人が参加できる画面の「こちら側」の近い関係を強める傾向に対応している。この状況下では世界は世界として、社会は社会として画面の向こうに存在しているだけで、「私的な」個人はもはや「自分が市民 [citoyen] である」という感覚をも失ってしまう⁴⁵。諸個人は参加しているような感覚の得られる家族、近隣など「私」・「君」・「われわれ」で語ることのできるつながり、つまり「近い秩序」だけを肯定し、そうした身近な関係としての「殻に閉じこもること [repliement]」になる⁴⁶。

そしてこの「閉じこもった」近い関係において諸個人はこれまで以上に互いの表面的な「資質や特性」に注目するようになる。つまり「仮面」としての独自性の追求が消費社会との関連で再び取り上げられていることが指摘できる⁴⁷。

消費社会のイデオロギー的公準であるような、完璧で理想的な消費者というのは、完成された「個性化」である。個性化の内容は個性的な車や、個性的な家具だ⁴⁸。

ルフェーヴルは、消費社会が「厳密さや科学、実証的で観察できる現実性」といったものによって「非イデオロギー化」を装いながら、じつはそれによって「消費のイデオロギー」を導

入していると批判する。画面の向こうの「商品の世界」、「貨幣の論理」が「独自性」の追求を科学的・経済的な指標によって遠回しに刺激し、消費者はそれに「説得」されるかたちで商品を購入する⁴⁹。換言すれば、企業の販売促進などの目的が、諸個人の独自性、^{ペルソナリゼーション}人格化の達成という目標にすり替えられつつ広告・宣伝、イメージ戦略に忍ばされている点をルフェーヴルは批判する⁵⁰。

このように、ルフェーヴルは新たな「内に閉じこもること」と消費社会との親和性や、倦怠を感じる個人、彼らの独自性追求を刺激し「説得」するメディアに着目することで「人間の砂」の議論を発展させていると考えられる。

2-4. 「サイバネティクス人」概念にみる同質的な「ふるまい」の悪化

では、ふるまいや態度の同質性の悪化についてはどのようなことが言えるだろうか。それについて確認するには、「人間の砂」というあり方が悪化した状態における人間の典型像を指す「サイバネティクス人」という概念に着目しなければならない。サイバネティクスの議論を援用したルフェーヴルの社会批判はとりわけ 1950 年代後半から 1968 年にかけて活発に議論されているのであるが、紙幅の制限のため本稿ではあくまで「サイバネティクス人」のふるまいや態度のみに着目して、「人間の砂」との違いを明確に示すことを目指す。

ルフェーヴルが同時代人を観察しつつ、利己的なふるまいのほかに、あらたに 3 点の共通した考え方やふるまい方を付加している。ひとつは「組織」の時代に関わる思考法であり、残りのふたつは経済や効率性に関わる態度である。まず「組織」の時代との関連で検討するのは「サイバネティクス人は機能することを望む、換言すれば機能だけであることを望む」という記述である⁵¹。つまり組織における代替可能な存在となってしまった諸個人はそこで求められる機能だけを果たすことによって組織の一員たらしめるとすることである。

つぎに指摘すべき共通したふるまいは「欲望 [désir]」を持たず、「このもの、あるいはあのものへの欲求 [besoin de ceci ou de cela]」しか持たないことである⁵²。欲求と欲望については、ルフェーヴル自身がヘーゲル、マルクス、ニーチェのそれぞれの欲求の特徴を捉え批判的に継承しようとしたこともあり幅広い検討が必要な主題である⁵³。ただしここではあくまでこの「このもの、あるいはあのものへの欲求」というのが、前項で確認したような仮面の独自性の追求のために広告等に「説得」されながら、なにか特定の商品を欲しがることであるという点だけ指

摘しておきたい。つまり、『序説』における「人間の砂」のようにただ単に独自であろうとするふるまいが同質性を形成しているのみならず、ここではその背後にそうした説得されて「欲求」することしかできなくなった人間の姿が想定されていると考えられる。

最後にホモ・エコノミクス的にもろもろのリスクを算定し、自らが「引き受けなければいけないリスク」が最小になる最短の経路を選択する合理的な姿勢の共通性がある⁵⁴。つまり、機械的な節約の思考にもとづいたふるまいの同質性である。

「機能」であろうとすること、「欲求」のみを持つこと、節約的思考という以上の3点が、1960年代における諸個人の同質性を規定する共通したふるまいや思考法として確認できる。これらの視点の導入によってルフェーヴルは、「人間の砂」における「ふるまい」の同質性の議論を20世紀半ばの社会状況に合わせて展開したことがわかる。

3. 逸脱から「差異化のための闘争」へ

3-1. 同質性と「誘導された差異」

本稿の最後にニーチェとルフェーヴルの2人の思想家における同質性から逸脱する者の位置づけに着目して、ルフェーヴルがニーチェの思考に寄り添いつつ、それをどのように乗り越えようとしたかについて考察しよう。すでに本稿では第1節において、少なくとも『ツァラトゥストラ』においてニーチェの「砂粒」の比喩が「畜群」概念によって示される人々と同一の対象を指していることを確認した。ここでは『ツァラトゥストラ』冒頭の畜群を説明した以下の箇所にもういちど立ち返ろう。

牧人のいない一個の畜群！誰もが同じものを欲し、誰もが同じである。別様に感じる者は、みずから進んで精神病院に入るのだ⁵⁵。

第一節では前半の「誰もが同じ」である点を強調したが、ここではその同質性を受け入れずそこから逸脱した人々への視線についてニーチェとルフェーヴルの共通点と相違点を探ることから考察をはじめよう。

『序説』や『私的意識』の執筆時のルフェーヴルにはまだこうした同質性からの逸脱者への注目は確認できない。しかし、1962年の『現代への序説』の時点では、前に論じた社会の「平

均地帯」から外れた例外的な者に関してルフェーヴルが「逸脱者〔le déviant〕」の語をあてていることを確認できる⁵⁶。つまり遅くとも 1962 年にはルフェーヴルは個人主義的な同質性の議論に「逸脱者」の視点を加えていることが指摘できる。そして、ルフェーヴルは精神病とまでは断言しないものの、この「逸脱者」を周囲の同質的な人々に「自分のことを理解してもらえない」ような「病人〔un malade〕」であると表現している⁵⁷。つまり、個人主義的な同質性から逸脱した人間を精神病患者あるいはそれに類するような「病人」で喩える点ではニーチェとルフェーヴルの同質性をめぐる議論は類似的である。

それでは 20 世紀にニーチェを読んだルフェーヴルがこうした同質性とそこからの逸脱という図式をこえ出るためにおこなった工夫とは何だったのか。それは逸脱した人々による「差異化のための闘争」という、1970 年の『差異主義宣言』で初めて提起された考え方の導入であると考えられる⁵⁸。端的には、これは逸脱者が同質性に対して抵抗し、その抵抗を通じて共同体が立ち上がるという論理である。前節で確認したような「説得」されながら個性的な商品を購入し、それによって表面的な独自性を身につけるといふときの他者との差異について、ルフェーヴルはこれを『空間の生産』のなかで消費社会という支配的なシステムに隷属した状態に留まった「誘導される差異」とであると批判する。そのうえで、闘争によって支配的なシステムに隷属せずにシステムと拮抗し、それを破壊しようとすることから生まれる「生産される差異」を創出すべきであることをルフェーヴルは説いている⁵⁹。この「生産される差異」の議論には、第 1 節の最後で確認した「隷属しない自由」というマルクス主義的な自由の考え方の反響を読み取ることができる。つまり、「差異への闘争」は「自由な共同体における自由な個人」への具体的な実践の道筋を示すことでもあると考えられるのである。

3-2. 闘争と差異の空間——マルクスをも乗り越えて「小さな社会」へ

最後に逸脱者による「差異化のための闘争」の具体的な例を確認することを通じて、こうした抵抗する周縁の人々という考え方がルフェーヴルにとってニーチェのみならず、マルクスを乗り越えることにもなっている点を指摘する。そのうえで個人主義的な同質性に支配されない社会としてルフェーヴルが理想とした社会についてみておこう。

「差異化のための闘争」が最もわかりやすく描写されているのは、『空間の生産』においてルフェーヴルが「スラム街」を論じる以下の箇所である。

[スラム街の] 密度の高い社会生活が存続するのは、闘争（階級闘争の現代的形式）の過程でその社会生活を自己防衛したり攻撃を仕掛けたりする限りにおいてである⁶⁰。

都市の同質性から「逸脱したもの」、つまりスラム街やゲリラ戦の空間などとしてはじめに生産される「差異」の空間があり、そこに人々が住んでいたとしても、ルフェーヴルにとってはそれだけでは十分ではない。なぜなら、そうした空間であっても同質性に対して「防衛にとどまって反撃に出ない」場合には、システムに隷属した「誘導される差異」として同質的な「均衡状態」に回収されてしまうと考えるからだ⁶¹。重要なのは社会の同質性、あるいは都市の同質性から逸脱した場所で、逸脱者たちがつねに自分たちの空間を防衛しつつ同質性に揺さぶりをかけるような社会的な実践であり、これこそがマルクスの階級闘争を刷新するルフェーヴルの「差異化のための闘争」なのである。

ここでマルクスを刷新するというときの新しさはルフェーヴル自身が上記の引用箇所である「現代的形式」にのみあるのではない。マルクスが目標とする社会が単一のまとまりとしての全体性や社会を計画していたという読解に基づいて、ルフェーヴルは「マルクスはそれほど差異が好きではない」と語っていることから、「差異」を鍵概念とすること自体がルフェーヴルによるひとつのマルクスの乗り越えの姿勢であったと指摘できる⁶²。

マルクスの単一の共同体観に対して、ルフェーヴルは「生産された差異」を体現する空間がゲリラ的にいくつもできるような「小さな社会」の必要性を説く。

諸階級や包括的な諸社会が現実的に無力であることを考慮すれば、限られた集団とごく小さな社会によるスタイルの創案あるいは創造が急務である。（したがってこの観点では、新たな諸都市には重要性和有益性がある）⁶³

これこそがルフェーヴルが 30 年以上にわたって取り組んできた個人主義的な同質性の問題へのひとつの回答であると考えられる。そして、同時にこうした「差異化のための闘争」の考え方は、本稿の冒頭で示したような 1980 年代以降とくに注目されている空間論者としてのルフェーヴルと、「人間の砂」概念を中心に「自由な個人」を目指して思索しつづけた人間論者として

のルフェーヴルをひとつながりの存在として架橋することを可能にする。

おわりに

本稿ではおおまかな時系列順にルフェーヴルの著作を検討しながら、「人間の砂」概念をめぐる一連の思索の全体像を明らかにすることを試みた。ニーチェからの借用とされている「人間の砂」概念を仔細に検討すると、たしかにニーチェの「砂粒」の比喩との共通性を確認できるが、利己主義に関してはマルクスの「分離」した個人主義の思考を取り入れたものであることが明らかとなった。さらに、マルクスの「疎外」の終末と「人間の砂」の解消が同義に捉えられており、これらに関するルフェーヴルの展望が楽観的なものからより現実的でやや悲観的な見通しへと変化するのに伴って、ルフェーヴルは個人に関する新たな思考を練り上げたことが確認できる。とくに、『序説』において問題にされた自己の「内に閉じこもる」ことから、家族や近隣、友人関係といった「近い秩序」の「内に閉じこもる」ことへと議論を修正する点に 1960 年代のルフェーヴルの個人主義をめぐる思想の特徴を見出すことができる。

また、「人間の砂」概念で提起された個人主義的な同質性の問題に対して、同質性からの「逸脱者」の可能性に賭けた「差異への闘争」の重要性を指摘する 1970 年代以降のルフェーヴルの思考は、ニーチェとマルクスの両者の思想を乗り越えることを可能にしている。それだけではなく、この「差異」をめぐる議論を蝶番にして「人間の砂」をめぐるルフェーヴルの人間論と、人文地理学や都市社会学において 1980 年代以降注目を集めているルフェーヴルの空間論をひと続きの問題として捉えられる可能性を示すことができた。つまり、「人間の砂」概念への着目によってルフェーヴル思想の底流にある「個人」をめぐる思想の連続性の一端があきらかになったと結論づけることができるだろう。

本研究は、JSPS 特別研究員奨励費 17J01101 の助成を受けたものである。

¹ ルフェーヴル思想の英語圏での受容とフランスでの再評価については以下を参照。Revol, Claire (2012) « Le succès de Lefebvre dans les urban studies anglo-saxonnes et les conditions de sa redécouverte en France » *L'Homme et la société*, n°185-186, Paris : L'Harmattan, pp. 105-118. ならびに、Paquot, Thierry (2009) « Redécouvrir Henri Lefebvre », *Rue Descartes* n° 63, Paris : Collège international de Philosophie, pp. 8-16.

² Lefebvre, Henri (2000) *La production de l'espace*, 4^e éd., Paris : Anthropos, p. viii. 以下、翻訳はとくに断りがない限り執筆者による。以下、同著作を *PE* と略記する。

- ³ Buller, Chris (2012) *Henri Lefebvre Spatial Politics, Everyday Life and the Right to the City*, New York and London : Routledge, p. 49. Gottdienner, Mark (1985) *The Social Production of Urban Space*, Austin : University of Texas Press, p.126. 他にも以下が挙げられる。Martins, Mario Rui (1982) « The Theory of Social Space in The Work of Henri Lefebvre » in Forrest, Ray et al. (eds) (1982) *Urban Political Economy and Social Theory : Critical Essays in Urban Studies* (pp. 160-185), Aldershot, Hampshire, England : Gower, p. 177.
- ⁴ Lévy, Bernard-Henri (2000) *Le Siècle de Sartre*, Paris : Grasset, pp. 173-174.
- ⁵ Pinto, Louis (1995) *Les Neveux de Zarathoustra : La réception de Nietzsche en France*, Paris : Seuil, p. 93.
- ⁶ *Ibid.* p. 100.
- ⁷ Butler, Chris (2012) *Henri Lefebvre Spatial Politics, Everyday Life And The Right To The City*, New York : Routledge, p. 59. 並びに、Merrifield, Andy (1995) « Lefebvre, Anti-Logos and Nietzsche : An Alternative Reading of The Production of Space » *Antipode*, Volume 27-3, Oxford : Basil Blackwell, pp. 294-303.
- ⁸ Leorke, Dale *et al.* (eds.) (2015) *Exercises in the History of Ideas : an Interview with Stuart Elden*, Victoria : Surplus Pty Ltd.
- ⁹ 該当箇所として以下が挙げられる。Lefebvre, Henri (1958) *Critique de la vie quotidienne, I. Introduction*, Deuxième éd. Paris : L'Arche, p. 165. 以下、*CVQ-I*と略記。 *Ibid.* p. 252.並びに *Ibid.* p.263. Lefebvre, Henri et Guterman, Norbert (1999) *La conscience mystifiée suivi de La conscience privée*, 3^e éd., Paris : Syllepse, p. 240. 以下、*CMCP*. *Ibid.* pp. 245-246. Lefebvre, Henri (1962) *Introduction à la modernité*, Paris : Minuit, p. 128. 以下、*IM*. *Id.* (1965) *Métaphilosophie*, Paris : Minuit, p. 30. 以下、*MP*. *Id.* (1967) *Position : contre les technocrates*, Paris : Gonthier, p. 211. 以下、*PCT*. *Id.* (1970) *Le manifeste différentialiste*, Paris : Gallimard, p. 69. 以下、*MD*.
- ¹⁰ 同時期にはニーチェの他にスピノザを読み、ショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』をフランス語で、『余録と補遺』をドイツ語で読んでいた。Hess, Rémi (1988) *Henri Lefebvre et l'aventure du siècle*, Paris : A.M. Métailié, p. 22.
- ¹¹ *CVQ-I*, p. 165.
- ¹² それぞれの文献における「人間の砂」を含む引用箇所は下記の通りである。Middleton, Sue (2014) *Henri Lefebvre and Education. Space, History, Theory*, London and New York : Routledge, p. 182. Henke, Holger (2003) « Freedom ossified : political culture and the public use of history in Jamaica » : Henke, Fred Reno (eds.) *Modern Political Culture in the Caribbean* (pp. 111-140), Mona, Jamaica : University of the West Indies Press, p. 133. Bennett, Andy (2005) *Culture and Everyday Life*, London : Sage, p.20.
- ¹³ *CVQ-I*, p. 165. 以下、引用箇所の傍線はとくに断りがない限り引用者による。
- ¹⁴ *CMCP*, p. 237. 強調はルフェーヴルによるものである。 *CVQ-I*, p. 101-102.なお、以下を併せて参照した。マルクス、カール 大内兵衛、細川嘉六訳 (1959)『マルクス＝エンゲルス全集 (第一巻)』、大月書店、407頁。
- ¹⁵ *CMCP*, p. 239.
- ¹⁶ *Ibid.* p. 240.
- ¹⁷ *CVQ-I*, p. 165.

- ¹⁸ Palante, Georges (1913) *Les antinomies entre l'individu et la société*, Paris : F. Alcan, p. 12.
- ¹⁹ ニーチェ、フリードリッヒ 吉沢伝三郎訳 (1993) 『ツァラトゥストラ・下 (ニーチェ全集 10)』、筑摩書房、48-49 頁。以下、『ツァラトゥストラ・下』とする。
- ²⁰ ニーチェ、フリードリッヒ 吉沢伝三郎訳 (1993) 『ツァラトゥストラ・上 (ニーチェ全集 9)』、筑摩書房、32 頁。以下、『ツァラトゥストラ・上』とする。
- ²¹ 『ツァラトゥストラ・下』、379-380 頁。
- ²² ニーチェ、フリードリッヒ 茅野良男訳 (1993) 『曙光 (ニーチェ全集 7)』、筑摩書房、202 頁。以下、『曙光』とする。
- ²³ 井西弘樹 (2013) 「認識と力：ニーチェ『曙光』における同情と「認識の情熱」の関係について」『メタフュシカ』(44)、大阪大学大学院文学研究科哲学講座、31 頁。なお、ルフェーヴルの「人間の砂」の議論には「恐怖」についての議論は見出せない。ただし、1960 年代には恐怖による諸個人の自己規範化の主題が「テロリズム」の語で論じられる。Lefebvre, Henri (1968) *La vie quotidienne dans le monde moderne*, Paris: Gallimard, p. 274.
- ²⁴ Lefebvre, Henri (2003) *Nietzsche*, Paris : Syllepse, p. 193. なお、ここでは再版された『ニーチェ』を参照したが、第一版の刊行年は 1939 年。
- ²⁵ 『曙光』、118 頁。
- ²⁶ マルクス、カール 城塚登訳 (1974) 『ユダヤ人問題によせて／ヘーゲル法哲学批判序説』、岩波文庫、42-43 頁。
- ²⁷ *CVQ-I*, pp. 183-184.
- ²⁸ *Ibid.* p. 184.
- ²⁹ Lefebvre, Henri (1940) *Le Matérialisme dialectique*, Paris : Alcan, p. 149. (=本田喜代治訳『弁証法的唯物論』、新評論社、1953、205 頁)。翻訳には邦訳を参照した。
- ³⁰ *CVQ-I*, p. 185.
- ³¹ *Ibid.* p. 166.
- ³² *Ibid.* p. 166. (=田中仁彦訳『日常生活批判序説』、現代思潮社、1968、93 頁)。翻訳にあたっては邦訳を参照した。
- ³³ *Ibid.* p. 165.
- ³⁴ *Ibid.* p. 166.
- ³⁵ *Ibid.* p. 241.
- ³⁶ *Ibid.* p. 263.
- ³⁷ *IM*, p. 146. (=宗左近、古田幸男監訳『現代への序説 (上・下)』、法政大学出版局、1972/1973、184 頁)。翻訳には邦訳を参照した。
- ³⁸ *IM*, p. 219.
- ³⁹ Lefebvre, Henri (1959) *La Somme et le reste*, Paris: La Nef, p. 748.
- ⁴⁰ Nietzsche, Friedrich Wilhelm. Bianquis, Geneviève (trad.) (1954) *Ainsi parlait Zarathoustra*, Paris : Montaigne, p. 125.
- ⁴¹ *PCT*, p. 211.
- ⁴² Lefebvre, Henri (1961) *Critique de la vie quotidienne II*, Paris: L'Arche, p. 97. 以下、*CVQ-II*とする。
- ⁴³ *Ibid.* pp. 94-95.
- ⁴⁴ *Ibid.* p. 94.

- ⁴⁵ *Ibid.* p. 94.
- ⁴⁶ *Ibid.* p. 94.
- ⁴⁷ Lefebvre, Henri (1966) *Le langage et la société*, Paris : Gallimard, p. 172.
- ⁴⁸ *Ibid.* p. 172.
- ⁴⁹ Lefebvre, Henri (1968) *Le droit à la ville*, Paris : Anthropos, p. 53.
- ⁵⁰ 「人格化」のフランス語の原語である« *personnalisation* »には、個人の好みに合わせた製品の「カスタマイズ」という意味もある。
- ⁵¹ *PCT*, p. 213.
- ⁵² *PCT*, p. 215.
- ⁵³ Lefebvre, Henri (1975) *Hegel-Marx-Nietzsche ou le royaume des ombres*, Paris : Casterman, pp.180-181.
- ⁵⁴ *PCT*, p. 215.
- ⁵⁵ 『ツァラトゥストラ・上』、32 頁。
- ⁵⁶ *IM*, p. 219.
- ⁵⁷ Lefebvre (1966), *op.cit.*, p. 372.
- ⁵⁸ *MD*, p. 51.
- ⁵⁹ *PE*, p. 431
- ⁶⁰ *Ibid.* p. 431. (＝齊藤日出治訳『空間の生産』、青木書店、2000、536 頁)。翻訳には邦訳を参照した。
- ⁶¹ *Ibid.* p. 430.
- ⁶² Lefebvre, Henri (1975) *Le temps des mépris*, Paris : Stock, p. 210.
- ⁶³ *IM*, p. 228.

« Sable humain » comme homogénéité individualiste Un aspect de la réception de Nietzsche chez Henri Lefebvre

Yukihiko YAMAMOTO

Le phénomène d'« homogénéisation et fragmentation », volontiers lié à sa thématique de « la production de l'espace », apparaît dès très tôt comme un des aspects problématiques de l'individualisme chez Henri Lefebvre. Notre propos est ici d'examiner comment il développe ce thème de l'homogénéité individualiste, en prenant comme fil conducteur la notion de « sable humain » provenant de Nietzsche.

Remontant à la source nietzschéenne de cette notion, nous montrons que Nietzsche lui-même n'utilise pas le terme de « sable humain » comme tel, mais que des expressions similaires dans *Aurore* et *Ainsi parlait Zarathoustra*, telles que « sable » et « grain de sable », ont probablement proposé à Lefebvre la figure des individualistes contemporains qui se ressemblent dans leurs gestes ou leurs mœurs quotidiennes, tout en se croyant distincts.

Dans les années 1950 et 1960, Lefebvre discute sur « l'aggravation » du « sable humain ». Il y observe l'avènement de la période où les individus sont remplaçables et où seuls les organismes semblent nécessaires et non superflus, ce en quoi il se différencie de Nietzsche. Mais en même temps, nous relevons à cet endroit un écho de la terminologie de Zarathoustra.

Une autre différence entre ces deux philosophes peut être constatée dans la façon de traiter les « déviants » qui, vivant hors de l'homogénéité sociale, détiennent selon Lefebvre les capacités différentielles résistantes aux pouvoirs homogénéisants, capacités auxquelles il accorde tant d'importance vers 1970. La lutte pour la différenciation, c'est l'originalité lefebvrerie formulée pour surmonter la théorie de l'anti-homogénéisation de Nietzsche.